

スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムとコナトゥス論

木島, 泰三 / KIJIMA, Taizo

(発行年 / Year)

2019-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第238号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2019-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(哲学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021757>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	木島 泰三
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	第 683 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 星野 勉 副査 教授 中釜 浩一 副査（学外）大阪大学名誉教授 上野 修

スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムとコナトゥス論

1. はじめに

本論文の目的は、17 世紀科学革命というヨーロッパ近代の大変革期を生きたオランダの哲学者スピノザ（Baruch de Spinoza, 1632—1677）の主著『エチカ』（Ethica, 1677）を、「自然主義的プログラム」と呼びうる構想の展開として読み解くことにある。

本論文によれば、「自然主義的プログラム」を読み解く鍵となるのが、神の実体の本質である「力（potentia）」と、その「様態」における表現である「コナトゥス（conatus）」（字義的には「努力」を意味するが、スピノザの場合個物の本性的な「運動傾向 [= 力]」を意味する）とである。かくて、「自然主義的プログラム」は、「万物は神によって予め決定されていた。但し、それは自由な意志ないし絶対的な恣意によってではなく、むしろ神の絶対的本性ないし無限の力によってであった」（第 1 部付録）というスピノザ自身の主張によって描き出される。そのさい、このプログラムを特徴づけるのは、自由な意志を徹底的に排除する必然主義もしくは決定論であり、それにともなう唯現実論である。また、スピノザの主要な関心が、自分の証明を把握するのに妨げとなる先入見、すなわち、目的論的な自然観を取り除くことであったことも、本論文では一貫して強調される。

なお、本論文は、日本倫理学会『倫理学年報』（2 編）、スピノザ協会『スピノザーナ』（2 編）など全国規模学会の査読論文、さらに『法政大学文学部紀要』（2 編）、法政哲学学会『法政哲学』などに掲載された諸論文をベースに、それらを加筆、修正すると同時に、他の部分を新たに書き下ろすことによって、構成されたものである。

2. 論文の目次

序論

1. 本稿の主題

- 2.スピノザの自然主義的プログラム
- 3.本稿全体の構成
- 4.本稿のスピノザ研究史上の位置づけ
- 5.本稿の目的、および基本方法とスタンス

第Ⅰ部 スピノザにおける内属と因果性：スピノザの決定論的行為者因果説

第1章 スピノザにおける内属と因果性をどう関係づけるか

- 1.実体と様態の関係は何か
- 2.スピノザの因果性の理論：内在的因果と他動的因果
- 3.本稿の解釈と先行解釈との比較
- 4.能動性と受動性の再定義
- 5.本章のまとめ

第2章 スピノザの決定論的行為者因果説：現代の行為者因果説との比較から

- 1.アルカイックな因果概念としての行為者因果説
- 2.現代の行為者因果説とスピノザの行為および因果の理論の比較
- 3.決定論的行為者因果説の倫理学的含意に関する試論
- 4.本章のまとめ

第3章 個物の生成消滅と様態の階層構造

- 1.内属関係と因果関係の統一的理解
- 2.「行為への決定」と「有への決定」の差異
- 3.個物による個物の産出の考察
- 4.さらなる帰結(その1)：内属と外的帰属、および自己破壊の問題へのこの概念の適用
- 5.さらなる帰結(その2)：「水平的因果」と「垂直的因果」の見直し
- 6.本章のまとめ

第Ⅱ部 現実的本質としてのコナトゥス

第4章 コナトゥス論の証明における神の力と個物の力：3P6と1P136の平行性から

- 1.コナトゥス論の基礎をめぐる解釈状況と本章の課題
- 2.3P6と1P36の平行性
- 3.3P7の位置付けについて
- 4.様態の本質の二面性
- 5.本章のまとめ

第5章 個物と変状、無時間的本質と特質：スピノザの四カテゴリー存在論

- 1.「特質」および「共通概念」の存在論的位置づけ
- 2.2Def2の読解とスピノザにおける種のないし類的本質の可能性
- 3.本質からの諸特質の「帰結」関係と因果的依存関係の差異：形相因解釈への代案
- 4.神的本質からの帰結関係：永遠性と無時間性あるいは「ある種の永遠性」の区別
- 5.本章のまとめ

第6章 コナトゥスの自然学：慣性的固執と〈偶然としての必然〉＝アナンケー

1. 慣性とコナトゥス
2. アナンケーとしての「自然の共通秩序」と個物の運命の偶然性：
スピノザと古代原子論
3. 自己保存と自己原因：近代エピクロス主義を補助線とするスピノザ有機体理論の解明
4. 有限な個物における神的必然性の現れの総合的把握
5. 本章のまとめ

第Ⅲ部 スピノザの力の形而上学：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

第7章 スピノザにおける力あるいは傾向性の概念：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

1. 現代形而上学における傾向性あるいは力
2. スピノザにおける力あるいは傾向性
3. スピノザ主義的な「力」の存在論的定位
4. 本章のまとめ

第8章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性（その1）：唯現実論的な力の概念

1. 行為者因果の理論と唯現実論的な力の概念
2. スピノザの必然主義および唯現実論の形而上学的位置づけ
3. スピノザにおける〈可能的な力〉の位置づけ
4. 現実存在しない個物についての定理(2P8)の唯現実論的な読解
5. 本章のまとめ

第9章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性（その2）：目的論なき力の概念

1. 目的論的な力の概念とそうでない力の概念
2. モルナーの力の理論とスピノザの力の理論の対比
3. 自己保存概念の拡張と〈常に顕在的な力〉の概念の普遍化
4. 本章のまとめ

第10章 「形相因」および「流出因」解釈との比較：ヴィルヤネンの解釈を中心に

1. ヴィルヤネンの解釈の概観
2. ヴィルヤネンの解釈の二世界論的性格
3. 「流出因」概念の二義性
4. 本章のまとめ

終章 スピノザの自然主義的プログラムの成否

1. スピノザの世界とスピノザの自然主義的プログラム
2. 自然主義の極限と擬人主義

3. 論文の要旨

- ・第Ⅰ部「スピノザにおける内属と因果性：スピノザの決定論的行為者因果説」

第1章では、「神」すなわち唯一の「実体(substantia)」と諸々の個物を含む「様態(modus)」

との関係が「内属かつ因果」の関係、言い換えれば「内在的因果」の関係であり、この関係は「実体」と「様態」の間だけではなく、「様態」とそれに内属する状態や行為（作用）などの「変状（*affectio*）」との間にも成り立つことが提示される。但し、個物は単独で「変状」の原因となることができず、他の個物の他動的原因による決定を必要とするがゆえに、〈他動的原因・内在的原因・結果としての変状〉という三項関係がスピノザにおける個物間の因果の基本となることがこの章の結論として導き出される。そのさい、この「内在的因果」を無時間的な内属関係に帰着させる従来の解釈に対して、それを作用因的な因果として解釈すべき根拠が明示される。

第2章では、「内在的因果」を作用因的な因果と解釈するには、それを「行為者因果（*agent causation*）」というアルカイックな因果概念と見なすのが適切であることが提案される。この「行為者因果」は、現代では自由意志を前提とした文脈で取り上げられることが多いが、あくまでもスピノザの「内在的因果」として、したがって「決定論的行為者因果」として理解されるべきことが主張される。

第3章では、個物の成立と維持を〈内属かつ因果〉の構造から解き明かし、個物を構成する要素的諸物体こそが〈個物の有の内在的原因〉であり、それらの物体を個物の産出と維持とに決定する外的諸物体が〈個物の有の他動的原因〉である、という結論が導かれる。また、その結果、神的な実体を頂点とする諸様態ないし諸変状の階層構造と諸個物の階層構造とが重なり合う、という結論も導かれる。

・第Ⅱ部「現実的本質としてのコナトゥス」

第4章では、『エチカ』第3部定理6で「各々の事物は、自己の及ぶ限り、自己の有に固執しようと努める」と定義される「コナトゥス」概念を、従来の解釈を批判的に吟味しつつ、テキスト内在的に解釈し直す作業がなされる。そこで明らかになるのは、第1に「自己の有への固執のコナトゥス」と「行為（作用）へのコナトゥス」というコナトゥスの二つの側面が、「自己原因的な力」と「万物の原因としての力」という神の力の二つの側面の表現であるということであり、第2に個物はその現実存在をすべて神に依存しているがゆえに、個物の現実的本質は個物の単なる抽象的本質とは異なり、常にそこに働く神の力そのものだということである。

第5章では、スピノザにおける個物の存在論考察が推し進められ、解釈上しばしば問題となる「特質（*proprietas*）」と「共通概念（*notio communis*）」、個的本質と類的本質、本質からの諸特質の帰結（*sequi*）、スピノザ的な永遠性と単なる無時間性との区別という諸概念が定義づけられる。そこから明らかになるのは、永遠の本質である神は、抽象的で無時間的な本質ではなく、個物の現実存在と持続の只中で作用する力だということである。

第6章では、個物のコナトゥスを通じて働く神の力のあり方が解明される。まず、コナトゥスが現在の有に固執するという慣性に準ずる働きであって、先取りされた未来を実現するという目的論的な働きではないことが確認される。次に、行為（作用）へのコナトゥ

スは、現実的本質であるかぎり、因果的連鎖の総体と関連づけられなければならないが、その総体における必然的決定が個物にとって偶然的な運命というあり方をとりうるということが確認される。ここに、スピノザの非目的論的で必然論的な「自然主義的プログラム」がはっきりとその姿を現わす。

・第Ⅲ部「スピノザの形而上学：〈現動的な力〉としてのコナトゥス」

スピノザにおける「コナトゥス（力）」概念の特徴が、アリストテレス以来の「力」の概念との比較において、明らかにされる。

第7章では、スピノザの「コナトゥス」および「デテルミナチオ（*determinatio*）」の概念は、現代の分析形而上学で説かれる「力（*power*）」ないし「傾向性（*disposition*）」の概念に近く、行使されつつある「現動的な力」であって、未顕現ないし未行使の力ではないことが示される。

第8章では、スピノザの「現動的な力」は、この現実以外にはありえないという「唯現実論」を支持する力の概念であり、アリストテレスの「可能態」としての力の概念とは相容れないことが論じられる。

第9章では、同じく、スピノザの「現動的な力」が、アリストテレスの「完成態（*entelecheia*）」を目指す働きとしての力ではなく、その限りで、非目的論的な原理であることが論じられる。

第10章では、「形相因」、「流出因」を軸とした、ヴィルヤネンによるスピノザの因果概念に関するプラトンの解釈と対比することで、本研究の特性が押し出される。

終章では、「自然主義的プログラム」というスピノザの形而上学解釈の成否が、一切の擬人化を排した徹底した自然主義という観点から再検証される。「神あるいは自然」もしくは「神即自然」と定式化される「神」概念は、自由意志も目的を考慮する知性も取り除かれた自然主義的な「力」として特徴づけられる限りで、伝統的な神概念を破壊するものである、という結論が語り出される。

4. 審査結果の要旨

その死後あたかも「死んだイヌ」のように無視されていたスピノザが哲学史上再評価されたのはドイツ観念論者によってであるが、なかでもシェリング、ヘーゲルは、スピノザの機械論的自然を目的論的有機体論的世界に置き換えると同時に、主観と客観の統一という「絶対的なもの」がこの目的論的有機体論的世界に現実化されているというように考えた。日本でのスピノザ哲学理解は、伝統的にこのようなドイツ観念論経由のスピノザ像の影を帯びていたといえる。

本論文は、スピノザのテキスト『エチカ』を丹念に読み解くと同時に、カーリー（Curley, E.D.）、デラ・ロッカ（Della Rocca, M.）、ヴィルヤネン（Viljanen, V.）などの現代英語圏

の最新のスピノザ研究をフォローすることによって、こうしたわが国でのスピノザ哲学理解を根底から覆し、新鮮なスピノザ哲学像を提示した点で評価することができる。また、モルナー（Molnar, G.）などの現代の分析形而上学にも寄与しうる斬新なスピノザ解釈は、グローバル・スタンダードに照らしても評価できるものである。

スピノザの神は唯一の実体であり、世界には神以外の実体は存在しない。しかも、神は万物の内在因であり、それ自身のうちに根拠を有するとともに、そこからすべてのものが生起する根源でもある。伝統的には汎神論と呼ばれている、このスピノザの形而上学を徹底して自然主義という観点から読み解くという点に、本論文の狙いがある。本論文は、この目的のもとに、首尾一貫した論理で構成されている。

一方で、実体と属性、質料因・形相因・作用因・目的因の四原因説などのアリストテレス以来の用語によりながら、他方で、厳密な数学的幾何学的方法によりながら、どのようにしてスピノザが伝統的な形而上学を解体して、自然主義的な形而上学を打ち立てたかの解明が本論文の骨格をなすが、それは次のように展開される。

スピノザの形而上学（＝存在論）は、実体、様態、様態の変状という三者から構成されるが、本論文では、まず、唯一の実体であり、万物の内在因である「神すなわち自然」の本質が、自由意志も目的指向性ももたない「力」とであると定義される。そして、この実体と様態の関係が内属かつ因果の関係として把握されるなかで、「神すなわち自然」に内在的因果という意味での「行為者性」が見いだされ、それと地続きのものとして人間の経験が捉え返される。これが本論文で展開される「自然主義的プログラム」の概要であるが、その限りで、本論文の主旨はきわめて明快である。

そして、個物とその変状との間には、他動的原因－内在的原因－内在的原因に内属する変状という三項的因果関係が成立しているという大胆な解釈が提示されるが、ここに他のスピノザ研究にはない本論文の独創性を認めることができる。

コナトゥス論については、個物の現実的本質としてのコナトゥスが、惰性、慣性、抵抗という系列から、可能的でもなければ、目的指向性ももたない、個物の現動的な力であると解され、ここから、唯現実論的で必然主義的な力の形而上学が導き出される。個物を現実存在たらしめている、この現動的力（コナトゥス）は実体である神の力に全面的に依存しているが、また反面、神の力が現実存在する個物の現動的力（コナトゥス）において表現され、現前しているとも言われる。ここにおいて、スピノザの自然主義的な力の形而上学は全貌を現わすことになるが、この徹底して自然主義的なスピノザ理解はきわめて斬新であり、内外のスピノザ研究の進展に資するはずである。

本論文は、ある意味できわめて野心的な研究であるとも言うるが、それだけにいくつかが指摘しておくべき問題点が残されてもいる。以下それを箇条書にて記す。

1) スピノザの形而上学を、カーリー以降の20世紀英語圏の自然主義や分析形而上学の系譜に引きつけて解釈する試みは、きわめて挑戦的な試みとして評価することができる。

しかし同時に、スピノザの哲学のうちに 17 世紀科学革命の影響を認める哲学史的な研究に一章を割いて論じる必要があったのではないか。そうすれば、アリストテレス以来の古代思想、中世思想との連続性と非連続性も明らかになり、スピノザの哲学をより明確に哲学史のうちに位置づけることもできたはずである。

2) 本論文の第Ⅰ部では、実体とその変状（様態）との間に「内属かつ因果」の関係、すなわち「内在的因果」の関係を認め、さらにこの「内在的因果」を個物とその変状との間にも認め、それを「行為者因果」として理解するという解釈が示される。その場合、実体の変状である個物にも一定の行為者性（＝行為主体性）が帰されるはずであるが、この個物の行為者性（行為主体性）についての議論が明晰さを欠いている。その曖昧さが、〈他動的原因・内在的原因・結果としての変状〉という三項的因果関係における、他動的原因と内在的原因の区別、他動的行為と自動的行為の区別の曖昧さを招来している。また、この三項的因果関係は個体の複合という事態を説明するのに有効かどうかについても疑問が残る。この点については、なお再考が必要だと思われる。

3) 本論文の第Ⅲ部では、唯現実論を支えるスピノザのコナトゥス、すなわち現動的な力は、未顕現、未行使の力でも可能的な力でもなく、それゆえに、「完成態 (entelecheia)」を目指す目的論的な力でもない主張されている。その観点から、モルナーにおいて「力あるいは傾向性」が特定の顕現への方向性をもつと定義されていることを理由に、モルナーの力の概念はスピノザのそれと相容れないと断定されるが、この断定は少しばかり乱暴のようにも思われる。ここでの問題は、唯現実論は可能態を全面的に排除するかどうか、また、モルナーの特定の顕現への方向性はそのまま目的指向性を意味すると解されるべきかどうか、というものである。というのも、特定の顕現への方向性、すなわち、傾向性 (disposition) には何の目的的牽引もない場合も十分に考えられうると思われるからである。こうした点については、なお再考が必要だと思われる。

しかし、以上のような問題点を指摘しうるにもかかわらず、本論文は、難解なスピノザ哲学を採り上げ、内在的因果、行為者因果、現動的力としてのコナトゥス、唯現実論の力の概念といった概念の分析から、スピノザの非目的論的で自然主義的なプログラムの新鮮な断面を呈示できている。その限りで、スピノザの研究に新しい局面を切り拓くものであると言えることができる。

5. 結論

以上により、審査小委員会は、木島泰三氏によって提出された博士（哲学）学位申請論文「スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムとコナトゥス論」を学術的に優れた研究であると評価し、木島泰三氏が博士（哲学）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。